



忙しさの中で あれやこれやと 思うこと

岩手県教職員組合 嶋崎 幸子

今年度私は1学年主任。元気過ぎる新入生の生徒指導に疲労困憊の毎日です。支援を必要とする生徒がいつも以上に多く、不登校、別室登校、暴れる、逃走、無気力、コミュニケーション不足からくるトラブル、ゲーム・SNS関係トラブル、家庭・生活状況への支援や指導などトラブル発生がない日はありません。そのような中で、生徒からの暴言を受けながら、真摯に生徒と向き合う若い担任たちを励ますことしかできず、年だけとっても実の無い自分に嫌気がさす毎日です。

そのような日々の中で思うことは「もっと職員が欲しい」「時間が足りない」ということです。個別指導、トラブルの解決、生徒の教育相談、先生たちとの打ち合わせなど、どれ一つとして満足に行うことができません。人不足という物理的な問題が多忙感を増大させ、精神的打撃を与えていると思います。生徒指導のために職員室にヘルプを求め走っても、職員室は空に等しくがっかりしながら教室に戻ります。そんなことがあった日は、「25人以下学級、できれば20人がいい」「学校規模に関わらず全教科の教員配置もある」「学級に一人ずつ副担任がいる」と夢のようなことを考えます。AIの社会になっても人を育てる根本は人と関わることだと思えます。人を育てるこ

とを疎かにして、住みよい国になるはずがありません。現場の教職員が心に余裕を持ちながら教育活動ができたらどんなに良いかと思います。

先日、震災の日と一緒に山へ逃げた生徒からメールが届きました。サッカーをしたくて高校・大学を選んだ彼でした。メールには大学在学中に町づくりということがずっと気になり続けていたこと。ドイツに短期留学した時に住民たちが町づくりに携わるということを目の当たりにし、ドイツに再び留学したこと。生まれ育った町に帰り、そこで自分のできることをしていくと決めたということが綴ってありました。メールを読んで元気になりました。東日本大震災から10年。最近このようなことが度々あり、本当に有り難いと思います。

教室で自分の生き方を考え、地域の未来について考えていくことが「学ぶ」の先にあることを、目の前の中学生とも行っていきたいです。震災当時の記憶はほぼない中学生たち。それでも彼らの一部に、保護者の身体の中に確かに傷が残っていて、私たちはそれを理解しながら寄り添い続けたいと思います。そして、仲間と学びながら地域で生きることを考えていきたいです。